

新型コロナから学んだこと ～会えないからこそ手紙を書こう～

邱 于娜
QIU YUNA

新型コロナウイルスが世界中に広がって、もうすぐ一年。誰かが地球上の特別なボタンを押してしまったかのように、世界の流れが滞っている感じがする。

中国政府は、都市を封鎖した。各国も国境を閉じた。日本も「自粛」を要請したが、中国での緊張感よりも、日本の方が、私は意外に安心感があった。自粛生活の中で、私たちは人生の歩みを緩めて、ずっと抱えてきた疑問の答えを探し求めるようになった。一方で、多くの時間を家族と一緒に過ごすこともできるようになった。

ただ残念なことに、私にはこのような機会がなかった。日本に来て二年目になる中国人留学生の私は、もう一年半も中国の家族に会えていない。故郷への思いが募る中、中国の有名な詩人、李白の『静夜思』をふと思い出した。その中で、私の心に響いた言葉がある。

「举头望明月，低头思故乡。」

日本語では、「頭を上げて山の端にある月の光を眺めていると、遥か彼方の故郷のことが思い出されてきた」という意味だ。詩の光景を思い浮かべていたら、私の心は一瞬で子供の頃に連れ戻された。おじいさんがベランダで私を膝の上に抱いて、はたきで私をあやしながら、この詩を読んでくれた。当時の私は、まだ李白の行間の思いを感じとれなかったが、今は李白と一緒に、郷愁というものを深く感じ入っている。

でも、李白より幸運なことは、私はハイテク時代にいる。家族と遠く離れていても、基本的に週

に二回はビデオ電話をする。毎回、数分間、たわいのない会話をして、お互いの最近の出来事を共有する。数分間のやりとりで家族の温もりを感じることができるが、何かが足りないような気がした。心の中に溢れてくる千言万語の思いは、「元気です」という言葉に変わってしまう。「そうだ、手紙を書こう」。ふと、この考えが頭に浮かんできた。

よく考えてみたら、私は前に手紙を書いてから、どれくらい経ったのだろうか？私達は毎日、無数のLINEを送っている。たくさんのツイートを書き、文字を打っているが、何年も手紙は書いていないだろう。私と同じ年代の人の中には、「手紙は、時代遅れなやり方だ」と言う人もいるかもしれない。手紙は、一つ一つの言葉を細かく吟味しなければいけないし、時間もかかる。しかし、それは同時に、とても優しいことだと思う。あなたが悲しい時でも、春風のように頭をなでて、心をそっと抱きしめ、応援してくれる。どんなに遠く離れていようとも、手紙に込められた想いは、きっと伝わると思う。

新型コロナウイルスで遅れを余儀なくされた私たちは、誰も責めるべきではない。いい天気の時、街角の喫茶店に座ったり、静かな夜に電気スタンドの灯りに身を委ねたりして、友人や家族に手紙を書こう。どんな言葉を綴ろうか、相手のことを考えていたら、遠くに月の明かりを見たときのように、心の中がほっと暖かくなった気がした。